

■温故知新…昭和史を振り返る

満州事変は侵略戦争だったのか

河野 信

はじめに

7月22日、兵庫県宝塚市在住のH夫人から久しぶりの電話がかかってきました。私とHさんとは戦争中からの長いおつきあいです。用件は「『文藝春秋8月臨時増刊号』に良いことが書いてあるから、是非読んでほしい」とのことでした。

早速家内に駅前書店にクルマで走ってもらい、B5版、222頁の雑誌を購入しました。この『文芸春秋』は戦後60年の特別企画で、「昭和と私・激動の時代を語り継ぐ」という特集版でした。

執筆者は明治44年生まれの日野原重明さんから昭和37年生まれの原武史さんまで、70名ほどの有識者です。

これだけ大部の雑誌に何が書いてあるかを一言で纏めることは無謀ですが、それを承知で私にとって一番印象に残った言葉をご紹介します。

昭和3年生まれの兼高かおるさんは、昭和を次の三つの時代に分けました。

第一期は、昭和元年から昭和20年まで。所謂戦争の時代。

第二期は、昭和20年から昭和55年まで。日本人が能力を発揮出来た時代。

第三期は、昭和55年から現在まで。富と自由を得て心を失っていく時代。

全く同感です。特に第三期の世相に心を痛めます。以下何人かの心ある方々の寸言を列挙してみましょう。

千 玄室（大正12年）

「昭和は彼方に消えてゆくのであろうか。最近の日本の変わり方はどうなんだろう。特に家族団らんの崩壊、そしてかたよった思想教育の結果は、社会における道徳理念の低下を兆している」

外山滋比古（大正12年）

「日本はアメリカから学ぶつもりで、自分を見失った」

塚本哲也（昭和4年）

「金銭万能、物質主義の腐臭芬々（フンブン）の国ようになった」

加藤恭子（昭和 4 年）

「日本が失ったものの一つは、種々の局面での精神的自立、そしてその気概である」

岸田 秀（昭和 8 年）

「日本はアメリカとの関係によって、誇りを失い、豊かな生活を得た」

藤原正彦（昭和 18 年）

「終戦後にアメリカにかけられた（おまじない）により、日本は外交、防衛ばかりでなく経済においても隷属関係になりつつある。独立国とは言えない有様だが、（おまじない）の解けない国民はそれを屈辱とも思わない」

温故知新（おんこちしん）

（おまじない）を解くためには、「温故知新」即ち歴史に学ばねばなりません。「温故知新」とは中国の古書『論語』にある言葉です。『広辞林』によれば「古きをたずねて新しきを知る。歴史を深く追究することによって現代への認識を深めてゆく態度」とあります。

これからの日本はどうあったら良いのか。どうして日本は心を失ってしまったのか。アメリカのおまじないに乘せられて、金銭と物質に最高の価値を与えたからです。それでは何故負けることが判っているアメリカと戦争したのか。それは中国と戦ったからです。では何故中国に侵入したのか。我々は何処で道を間違えたのか。謙虚に先人の足跡を尋ねるべきでありましょう。

歴史認識の問題・教科書の比較

日中、日韓の関係がかつて見ない程、悪化してきました。

「東亜の大同」を終生の念願とし、1939年に「東亜連盟協会」を設立した石原莞爾は、どのような思いでこの関係悪化を見ているのでしょうか。

関係悪化の原因の一つとして、「歴史認識の相違」が考えられております。では日中・日韓間の歴史認識の相違とはどのようなもののでしょうか。先ず、昭和の初め1931年の満州事変を日中両国がどう認識しているのか、両国の教科書を比較してみたいと思います。果たして何処に相違点があり、また何処に類似点があるのでしょうか。現在の両国の教科書を比較してみましよう。

<日本＝『日本の歴史』高校用 山川出版社 2004年3月>

【孤立する日本・満州事変】

「1930年代にはいつ、協調外交がゆきづまり、満州における日本の権益がまもれないのではないかとの危機感が高まると、軍部のあいだには、軍事力を用いてでもこれを打ち破ろうとする気運が高まった。

1931（昭和6）年9月18日、武力による満州の制圧を企てた日本の関東軍は奉天近郊の南満州鉄道の線路を爆破し（柳条湖事件）、戦争のきっかけをつくって奉天附近の中国軍への攻撃を開始した。こうして満州事変がはじまった。第二次若槻内閣は「事変の不拡大」を内外に声明したが、関東軍はこれを無視して軍事行動を拡大した」

<中国＝『中国近代現代史』高校版 人民教育出版社>

【九一八事変・柳条湖事件】

「1931年9月18日夜、月と星が輝く瀋陽の空に突如爆音が鳴り響き、南満州鉄道の柳条湖の鉄路が爆破された。東北の大地の安寧が打ち破られたこの事件—日本の侵略軍は計画的に柳条湖事件を引き起こしたにもかかわらず、反対に中国軍が鉄路を破壊したと濡れ衣を着せ、この事件を口実に中国東北軍の駐屯地である北大營を進攻し、瀋陽を砲撃し、九一八事変が勃発した。

九一八事変の勃発当時、瀋陽を守っていた東北軍は、日本の侵略軍に抵抗するよう求めたが、蒋介石は抵抗するなどの指令を下した。翌朝日本軍は瀋陽を占領、その後、日本軍は次々と東北三省を占領した」

満州事変の真実

両国教科書には共通する致命的欠陥があります。それは何故満州事変が勃発したのか。その理由が明確に記述されていないことです。

日本の教科書には「日本の権益が守れないとの危機感」から軍事行動を起こした、と記述されていますが、何故軍事力を用いなければ権益が守れないのか、その権益とは何なのか、その理由が説明されていません。

一般的には満州事変は、15年戦争の発端であり、諸悪の根源のように取り扱われていますが、はっきりした理由もなしに柳条湖事件が起きたのでしょうか。諸悪の根源であるなら歴史学者は尚更、その発生の原因を追求すべきでしょう。

中国の教科書は「（日本軍は何の理由もなく）南満州鉄道の柳条湖の鉄路を爆破した」と書いているだけです。これでは歴史の記述とは言えません。原因を探求せずに結果だけ力説し、総ての罪を日本に被せるのは、公平であるべき教科書作成者の態度ではありません。

石原莞爾は

「満州事変は枯れ草に火がついたようなものだ」と云っていますが、その枯れ草とは何だったのでしょか。満州事変にはそれなりの時代背景があったはずで、これを解明しないで、いきなり関東軍が鉄道を爆破し、中国軍を攻撃したというのは、余りにも没論理的です。

両国の歴史家による史実に基づいた再検証が行われることを、期待します。

日本の歴史教育

我が国の中学、高校での歴史教育は中途半端だと言われています。古代史から始まるのんびり授業を進める結果、三学期になると時間が無くなって、昭和史には殆ど触れない内に学年終了となってしまいうそうです。ほんとうでしょうか。

特集『文芸春秋』にあるように、今後の日本が間違いない道を歩むためには、昭和史を徹底的に検証する必要があるのです。前半の古代史なんかを簡略にしても、現在の日本を造り上げた昭和史に多くの授業時間を割り当てるべきです。生徒同士を討論させ、苦難の昭和史を実感させるべきです。有史以来、日本民族全体がこれ程の苦難を嘗めた時代は昭和以外にはありません。

満州事変は表面的にはたしかに日本軍による侵略戦争です。然し、あの当時の国際情勢と日本国内情勢と満州の状況は、現在では考えられない程に複雑であり、急迫していて、単純に日本軍の一方的な侵略行動であると断定出来ない面があるのです。

この点、その後の日中戦争、第二次大戦とは戦争の目的、性格が全く違います。

石原莞爾は後に「満州事変は永遠の謎だ」とも言っています。

われわれはよくよく正確な史実、資料に基づいて、客観的な「歴史認識」をしなければなりません。主観的な「自虐史観」も良くなければ、「傲慢史観」も正しくありません。

先述のように満州事変が侵略戦争の出発点だというならば、その満州事変をリードした石原莞爾は当然A級戦犯となつてしかるべきです。彼は1947年5月酒田の極東軍事裁判臨時法廷に「一証人」として出廷しました。その時のエピソードが残っています。

裁判長は静粛を聴衆に喚起したのち、石原に質問した。

「訊問の前に何かいうことはないのか」

「ある。……不思議にたえないことがある。満州事変の中心はすべて自分である。事変終末の錦州爆撃にしても、軍の満州建国立案者にしても皆自分である。それなのに自分を戦犯として連行しないのは腑に落ちない」

と堂々と発言した。裁判長も検事も狼狽して

「ジェネラルは戦犯として取り調べるのではない。証人として調べるのだ」と言い、そして

「証人はそんなことを言ってはいけない。こちらから訊ねることに対して『イエス』か『ノー』かを答えればよい」

と注意して検事の訊問に移った。(横山臣平『秘録 石原莞爾』1971 芙蓉書房)

歴史とは人間が造るものです。然しその歴史の記述に人間の先入観があってはなりません。資料と史実に基づき出来るだけ公平に記述されるべきものです。

私は近い将来、日中合同の教科書作成チームが出来て、4000年のアジア史が同時出版される日が来ることを、心底から祈っています。